【600】

氏　　名	橋本智津子（はしもと ちづこ）
学位(専攻分野)	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博第197号
学位授与の日付	平成15年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
学位論文題目	ニヒリズムと無の思想 ——ショーペンハウアー／ニーチェとインド思想——
論文調査委員	（主査）教授 有福孝岳　教授 安井邦夫　教授 小川　侃

論文内容の要旨

本論は，19世紀後半にニーチェによって確立されたニヒリズム思想とインド的な「無の思想」との思想的関連について探究することを試みるものである。つまり，通常は，ニヒリズム思想確立の原因に，同時代の歴史的背景との関連を考慮するのが一般的な見方なのであるが，本論はそれとは異なる視点から，ニヒリズム思想の内実を探ることを試みるのである。

ニヒリズム思想を確立したのはニーチェであるが，そもそもその思想に多大な影響を与えたショーペンハウアーのペシミズムにおいて，「無」という概念は重要な位置を占めている。その考察のポイントとなるのは，ちょうどショーペンハウアーの生きた時代にヨーロッパにおいて学問として本格的に研究され始めたインド思想における「無」の概念である。ロマン主義においてもてはやされたインド思想は，ロマン主義と関わりの深いショーペンハウアーにとっても多大なる関心の的となった。その際，ヨーロッパ人の関心を引いたのは，それまでのヨーロッパにおいては今まで知られたものとはまったく別種の「無の思想」であった。そのため，ショーペンハウアー思想の根底には，インド思想における無の思想の影響が強く見られる。そして，そのショーペンハウアーの影響を受けたニーチェのニヒリズム思想にもまた，インド的な無の思想の彰響が垣間見られるのである。本論は，ショーペンハウアーからニーチェへの思想のつながりの内にニヒリズム思想の核となる無の思想を見出し，その無の思想の意味を解明するために，インド思想，主に仏教思想との関連を分析することを，目的としている。

本論は，第1部「ショーペンハウアー」，第2部「ショーペンハウアーから初期ニーチェへ」，第3部「ニーチェ」という全3部5章と付論から構成されている。

まず第1部ではショーペンハウアー哲学における無の思想が，インド思想との関わりにおいて解明される。そもそも，ショーペンハウアー哲学には，二種類の無の思想が現れる。一つはこの世界は苦悩に充ちており世界を「無内容，無価値 nichtig」とみなすペシミズムの思想であり，もう一つは苦悩に充ちた世界からの解脱を表す「無 Nichts」である。第1部においては，第1章「価値転換の契機としての無の思想」と第2章「救済（解脱）としての無の思想」で，上述の無の思想と，ショーペンハウアーが主著『意志と表象としての世界』の執筆時以来，多大な関心を寄せていたウパニシャッド及び仏教思想との内容的な関連について，順次論究される。

第2部ではショーペンハウアーから初期ニーチェに至る無の思想の移行を扱う。第3章「『無性』の思想の流れ」では，ショーペンハウアーの世界観を表す無内容性・無価値性の概念が，ショーペンハウアーに共感していた初期ニーチェにいかに受容されたのか，「ディオニュソス的世界観」にどう反映されているのか，ということが解明される。第4章「『無』の思想の流れ」では，ショーペンハウアーにおける解脱としての無の思想が，初期ニーチェによってどのように受け止められたのか，という点について，仏教における無の思想との関わりが考慮されながら検証される。

第3部となる第5章「ニヒリズムにおける仏教的無の思想」では，中期以降のニーチェによって確立されたニヒリズム思想における無の思想の内実が解明される。ニヒリズムにおいて仏教的無の思想とはいかなる意味を持つのか，多様なニヒリ

ズム概念において仏教的無の思想はいかなる位置を占めるのか，という問題が取り扱われる。

終章では，本論全体の総括が示され，ショーペンハウアー思想とインド思想の間における「無の思想」を介した深い関わり，及び，そのショーペンハウアー思想の色彩を強く帯びたニーチェのニヒリズム思想，というショーペンハウアーからニーチェへの無の思想の系譜が明確にされる。ショーペンハウアー／ニーチェとインド的な無の思想（及び，インドから東洋全体へと広まった仏教的な無の思想）との関わりの解明によって，無の思想が西洋思想と東洋思想の間のひとつの接点となったことが示される。

さらに，本論第１部の補足的データとして，付論「ショーペンハウアーと『ウプネカット』—自己認識の問題を中心に—」が付された。これは，ショーペンハウアーが主著執筆時に非常な感銘を受けたウパニシャッドのラテン語訳『ウプネカット』の思想内容の解明を目的とした研究資料である。

以上述べたように，本論は，ショーペンハウアーとニーチェの哲学がいかにインド的な無の思想と関わり合っているかを広く文献をあさりながら，テキストを丹念に分析しつつ，解明している。なかでも，インド的な無の思想が，両者にどのような影響を与えたかという問題を解明するために，彼らが直接読んだ文献を参照するという研究姿勢が本論の特質をなしている。

論文審査の結果の要旨

これまでに，ショーペンハウアーやニーチェと，インド哲学や仏教思想との関わりを論じる研究は，日本においてもヨーロッパにおいても比較的数多く発表されてきた。しかしそれらのほとんどすべてが，今日の研究成果に基づいたインド思想と，ショーペンハウアー，ニーチェの思想とを比較し，両者の思想とインド思想との類似点や相違点を指摘するものである。

これに対して，本論の特徴は，ショーペンハウアーとニーチェが同時代のインド学研究の書物から汲み取ったインド思想が，彼らの思想に実際にどのような影響を与えたのかを解明する点にある。そのため，実際に彼らが当時読んだインド学の文献を一次資料として用いている。特に，ショーペンハウアーが当時ウパニシャッドのラテン語訳『ウプネカット』に多大な影響を受けたことは，著作や草稿の到るところで明らかにはなっているが，実際にこの書を資料として用いた研究は，内外を問わず，これまで発表されておらず，画期的研究である。『ウプネカット』はサンスクリット語からペルシャ語，ペルシャ語からさらにラテン語という二度に渡る翻訳を繰り返していることなどから，現代のインド学で我々が通常読むウパニシャッドとは内容が大きく異なっている点が多く，通常よく見られるようなウパニシャッドとショーペンハウアーの比較思想研究では，思想的な影響関係を正確に知ることができない。本論は，ショーペンハウアーが実際に所蔵していた自家用の『ウプネカット』を用い，そこにショーペンハウアーによって書き込みされた内容も考慮している。仏教に関する文献についても同様の方法を用いていることから，本論は，かなり正確にショーペンハウアーが当時影響を受けたインド思想の内容を追究できている。

また，ニーチェに関しても，同じく彼が実際に読んだ仏教思想に関する文献が参考資料として用いられている。彼が読んだことが判明している仏教に関する本は数が少ないため，本論はそのほとんどをカバーしており，彼の仏教的無の思想に関する知識全体を，本論によってほぼ確実に正確に知ることができる。ただし，ニーチェはショーペンハウアーと違って，ほとんど自家用の本に書き込みを残していないため，ニーチェが特にどの部分に関心を抱いたのかを解明するにあたっては，論者には，草稿や著作における記述から推論するという方法をとるしかなかった。

これは，これまでの比較思想的研究には見られなかった種類の研究方法である。例えばこれまでの研究では，ニーチェのニヒリズムと仏教の無常観との類似点や相違点が指摘されても，それはあくまでも比較思想の域に留まっており，ニヒリズム思想の形成に無常観が影響を及ぼしたと主張することはできなかった。しかし，本論は，上述のような資料を用いることによって，正確に彼らが当時知り得たこと，及び影響を受けた内容を突き止め，そこからニヒリズム思想の成立に内的に関係したインド思想の内実を解明することに成功したのである。

また，ショーペンハウアー哲学の内に「無の思想」を追究するという立場の論考や，ショーペンハウアーが関心を持ったインド思想に「無の思想」を見出すことによってその影響関係を探るといった研究は，これまでに発表されていない。すなわち，ショーペンハウアーのペシミズム思想は，後にニーチェによって確立されたニヒリズム思想の先駆として見られるの

が普通であるが，積極的にそのペシミズムにおいてニヒリズム思想の核心となる「無の思想」を見出すことは，これまでの研究にはなかったのである。ニーチェによるニヒリズム思想の確立において，ショーペンハウアーにおける「無の思想」がどのような役割を果たしたか，という点に着目し，「無の思想」の流れを詳細に分析することによってニヒリズム思想の確立状況を解明する，という本論の方法は，ニヒリズム思想の内実を解明するに際し，これまでとは異なる新しい視点をもたらしたものといえよう。

以上述べたように，本論は，広範な資料を収集し綿密に分析することによって，ショーペンハウアー並びにニーチェがインド思想とどのように関わり合っていたかを斬新な方法に基づいて解明している。特に，ウパニシャッド聖典のペルシア語訳からのラテン語訳「ウプネカット」の研究のごとき，ショーペンハウアー研究としては世界的に見ても未開拓の分野に果敢に踏み込んで，ショーペンハウアーとインド思想との根源的関係について新たな光を与えたことは特筆すべき成果であると判断される。また，本論文は，人間・環境学研究科（人間・環境学専攻，人間形成論講座）の基本理念にもよく合致している。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成15年１月20日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果，合格と認めた。